

2021年3月14日(日)「災いを乗り越えるもの」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 8:6-9

- 6 確かに、すべての出来事には時と法がある。災いは人間に重くのしかかる。
- 7 やがて何が起こるかを知る者は一人もない。確かに、何が起こるかを、誰が人に告げることができるだろう。
- 8 息を支配し、息を止められる人はいない。また、死の日を支配できる人もない。戦いからの免除はなく、不正はそれを行う者を救えない。
- 9 これらすべてを私は見て、太陽の下で行われるすべての業に心を向けた。今は、人が人を支配し、災いを招く時代である。

《新改訳 2017》伝道者の書 8:6-9

- 6 すべての営みには時とさばきがある。人に降りかかるわざわいは多い。
- 7 何が起こるかを知っている者はいない。いつ起こるかを、だれも告げることはできない。
- 8 風を支配し、風をとどめておくことのできる人はいない。死の日を支配することはできず、この戦いから免れる者はいない。そして、悪は悪の所有者を救い得ない。
- 9 私はこのすべてを見て、私の心を注いだ。日の下で行われる一切のわざについて、人が人を支配して、わざわいをもたらす時について。

【序論】

コヘレトの言葉からご一緒に「知恵ある生き方とは何か」ということを学んでおります。これは宗教の真髄とも言えるでしょう。何らかの信仰心を持って生きようとする人は、困難な地上の生涯を歩み抜く知恵を求めていると思います。また、より真剣に宗教を求める人々は、自分の永遠の問題に取り組もうとしているでしょう。聖書は、単なる処世訓ではなく、「神の知恵」(啓示のことば)です。知恵はこの世界に秩序をもたらします。本能のままに生きる動物には形成することのできない秩序ある世界が、人間によって形作られている。契約があり、法律があります。人間は神に似せて造られており、知恵をもって世界を管理すべく立てられている。しかし、人間は一定の制限の下で生きている存在であり、時間的・空間的・能力的な枠の中で活動しているに過ぎない。それがコヘレトの(ギョッと何かに押し込められたような)人間観であり、人間が神になり得ない所以^{ゆえん}です。究極のところは神が万物を支配しているのであって、人間はその支配下で「定められた枠内の秩序」を構築しているだけだということです。今日のテキストを読み解くに当たって、隠れたキーワードを念頭に置く必要があるでしょう。それは「人間の限界」です。

【本論】

今日の箇所は次のような構造になっています。

- A. 人に重くのしかかる災い（6節）
- B. 人間が支配できないもの（7～8節）
 - ①息／風 ②死 ③戦 ④悪
- A'. 人に重くのしかかる災い（9節）

A. 人に重くのしかかる災い（6，9節）

確かに、すべての出来事には時と法がある。災いは人間に重くのしかかる。（8:6）

前半の「時と法」という表現は5節にも出てきました。「**王の命令を守る者は悪事を知らない。知恵ある者の心は時と法をわきまえる**」。ここでは知恵ある者は権力にいたずらに逆らうことをせず、法を守って生き、神の審きの時を待ち望むということが言われていました。独裁主義政権の下で喘ぐ国民の叫びが反映されているようです。一度政権が確立すると、法律そのものがその政権が有利に存続していく方向で改訂されていく傾向があります。国家に新しい風が吹き込まれるには、それなりの時間を要することが多いでしょう。それを受けて、すべての物事にはふさわしい時、神が定めた時があることをコヘレトは改めて強調しています。しかし、人はその時がいつなのかを知ることができません。本節後半で言われている「災い」とは、人間の知識の限界のことであり、苦しみがいつ去るのかを知りたいけれど知ることができない葛藤を言い表しています。9節ではもう一度同じテーマが出てきますが、コヘレトが「災い」と読んでいる事柄が具体化されています。

これらすべてを私は見て、太陽の下で行われるすべての業に心を向けた。今は、人が人を支配し、災いを招く時代である。（8:9）

「災い」とは、人が人を支配し、力ある者が弱い者から搾取することだと言われています。このテーマは4:1-3にも出てきていました。

私は再び太陽の下で行われるあらゆる虐げを見た。見よ、虐げられる者の涙を。彼らには慰める者がいなかった。また、彼らを虐げる者の手には力があつた。彼らには慰める者がいなかった。（4:1）

コヘレトが社会に対して抱いている問題意識、不公平な世の中に対する苛立ちが痛く伝わってくる内容です。神の審きの日を知りたい、でも知り得ないと葛藤している。

B. 人間が支配できないもの（7～8節）

やがて何が起こるかを知る者は一人もいない。確かに、何が起こるかを、誰が人に告げることができるだろう。（8:7）

今まで、コヘレトはこの世の権力をどうすることもできない弱者の立場に立って苦しんできました。しかし、ここでは権力者を含む「すべての人」が未来に起こる出来事をコントロールできないという「人間全般の無力さ」について語っています。地上でどんなに力を持ったとしても、それはほんの一時の夢なのだと。コヘレトは、人間が支配できないものを4つ例示しています。

①息／風

息を支配し、息を止められる人はいない。（8:8a）

人間が支配することのできない第一のものは「息」です。原文で使われている「רוח／ルアハ」という言葉には「息」「風」「霊」「精神」といった意味があります。いずれも人間がコントロールできないものではありませんが、「息」と言った場合には②の「死」との関係が強くなるでしょう。「風」と訳してみると、主イエスがニコデモに対して語った言葉が思い起こされます。

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。（ヨハネ 3:8）

風（自然界）を支配しておられるのは神であって、人間はその現象に対応することでやっとの存在である。事実、人は感染症を支配することができず、ただ対応することでやっとなのではないのでしょうか。世界各国がコロナに翻弄されています。

②死

また、死の日を支配できる人もいない。（8:8b）

自分がいつ死ぬのかは、誰も知るところではありません。死にたくなくても、人生の時間を決めることは許されていません。その日を先延ばしにすることはできず、どういう死に方をするのかも分かりません。私事ですが、しばらく前に少々塩分を摂りすぎて体調を崩してしまいました。糖分を控えていた反動でそっちに向かってしまったようです。ある日、眠るときに「もしかしたらもうこのまま目覚めないのではないか」という不安がよぎりました。まだまだやらなくてはならないことがあるのに、子どもたちの自立する姿を見ていないのに…。幸い翌朝も目覚めることができましたが、改めて死の日を知らない自分の無力さを痛感したものです。

③戦

戦いからの免除はなく (8:8c)

「戦い」とは、一般的な「戦争」を意味するのか、あるいは新改訳が「この戦い」と訳しているように先の「死」との戦いを意味するのかは、定かではありません。文脈では後者がふさわしく思われます。聖書は「死」を「最後の敵」と呼んでいる（Iコリント15:26）。誰もが最終的には死ななくてはならず、それに争うことはできません。それは、現世において権力を有する者も同じです。しかも、上に立つ者にとっての死は、一般人の死よりもはるかに重たい意味合いを持ちます。なぜなら、彼らはそれだけ多くの人の人生に対する責任を負ったのであり、その責任は神の御前で問われるものとなるからです。最後の審判の日には、地上で苦しんだ弱者の方が裁きの基準は低くなると思われま

④悪

不正はそれを行う者を救えない。(8:8d)

ここで言われていることはいくぶん曖昧ですが、コヘレトが言わんとしていることは、悪を行なう者が何らかの行為によって少しでも人に利益を与えたとしても、それによってその人が救われるのではないということでしょう。人は罪を償うために、別のところで善を行おうとする傾向があります。この無自覚的な罪意識は、人を歪んだ善行へと押しやります。しかし、それ自体がその人を罪と死から救うのではないとコヘレトは言うのです。

A'. 人に重くのしかかる災い (9節)

どこまで行っても逃げ道のない人生を送っている人間の姿が描かれています。まさに「袋小路」です。9節は既に6節と一緒に扱いましたので繰り返しません、その中にポツンと出てきていた言葉に注目したいと思います。「**太陽の下**」という価値観に立ってコヘレトはこれまでに語ってきたすべての事柄を見ていたのです。もし神なしに生きたならば、人は死を乗り越えることは決してできず、罪の赦しを得ることもできないのだと。

では、人にとって重要なのは何か。それは、神を信じることです。新約的価値観に立って同じことを申し上げるならば、救い主イエス・キリストを信じ、罪の赦しを得ること、これ以上に重要なことはありません。この信仰によって、人は永遠に生きる者とされる。キリストは死を滅ぼし、従う者にも死に打ち克つ道を開いてくださったからです。

【結論】

コヘレトの言葉は「旧約の限界」の中で語られていますが、読者は彼の言葉の裏側に隠された、必死で何かを待ち望んでいる思いを読み取る必要があります。彼は敢えて「太陽の下」の行き場のない価値観を描き、そこからの解放の道を暗示しているのです。彼の中にある解答は、神を信じ、神との永遠の関係に入ることです。新約聖書を知る者にとっては、この希望ははるかに大きく開き示されます。キリストが私たちの罪を背負い、十字架上で死なれたことにより、信じる者は罪の赦しと永遠のいのちを受けると。誰もが死と審きの前に立たされますが、信仰はそれらすべてを乗り越えさせるのです。

【祈り】

人を罪より贖い給う、天の父なる神様。私たち人間は何と小さく、限りある存在でしょうか。自分の出生も、死の日も、生まれる場所も定めることはできず、短い人生の日々を必死で生きて終えていきます。コヘレトはその現実には私たちの目を向けさせ、一体何を教えようとしているのでしょうか。私たちは、彼のことばの背後に隠された「神との永遠の交わり」を見落としません。その交わりに入ることにより、私たちは永遠との関わりを持つようになります。キリストにあって、そのご計画が成就したことを私たちは知っています。この信仰に生きる道に立たせてください。この人生には確かに限りがありますが、主イエスは甦りであり、いのちであり、すべてを乗り越えさせるお方です。私たちはこのことを信じます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人の限りある人生に介入し、ご自身との永遠の交わりに入らせ給う、父なる神の愛、
十字架の御業により、罪からの贖いを実現し、御国への門となり給うた、主イエス・キリストの恵み、
現実の苦難に喘ぐ者に希望を与え、死にさえも打ち克たせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。